

雲居雁が聞いた音

—「風の音・竹のそよめき・雁の声」—

古瀬雅義

はじめに

『源氏物語』巻二十一「乙女」は、三条宮の大宮のもとで育てられた光源氏の嫡子夕霧と、内大臣の娘雲居雁の初恋と別離が描かれ、『伊勢物語』『筒井筒』との関連などが論じられると同時に、巻末に描かれる六条院の造営とも関連して『源氏物語』の登場人物たちの世代交代も示唆される重要な巻である。

母大宮の御機嫌伺いに訪れた内大臣は、偶然に女房たちの不用意な会話を立ち聞きしたことから、大宮に預けて養育させていた妾妻腹の娘雲居雁が幼なじみの夕霧と恋仲になっていることを知る。

大学の君として秀才ぶりを発揮する甥の夕霧に将来有望な資質を認めながらも、冷泉帝の立后争いで嫡妻（右大臣家の四の君）腹の弘徽殿女御が光源氏の世話する梅壺女御（故先坊の後六条御息所の娘で光源氏の養女となっていた斎宮女御。後の秋好中宮）に破れた内大臣は、光源氏に対する対抗心からそれまでなおざりにしていた

雲居雁に対する態度を一変させ、東宮妃候補となる大臣家の重要な持ち駒としてとらえ直し、自邸に雲居雁を強引に引き取る。内大臣の性急な処置に、母大宮は老いの生き甲斐を奪われたと嘆き、夕霧は初恋の実らぬ展開に自分の若さと力の無さを思い知らされるのだが、父親の思惑で無理矢理に引き裂かれる初恋の二人が中障子を隔てて嘆き合う場面に「風の音の竹に待ちとられてうちそよめくに、雁の鳴きわたる声のほかに聞こゆるに、幼き心地にも、とかく思し乱るるにや、『雲居の雁もわがごとや』と独りごち給ふけはひ、若うらうたげなり」という描写がある。『白氏文集』をふまえた表現に、雲居雁の名前の由来となる心情表現が続く当該場面における擬人化表現に注目して、その対象と効果を考えてみたい。

一 当該場面の検証

大宮は、亡き愛娘葵上の忘れ形見として膝下で養育していた夕霧を、数ある孫たちの中でもとくに可愛がり、その資質も高く評価していた。共に養育していた孫娘の雲居雁との仲を「二人ともまだ幼いから」と見過ごしていたとしても、夕霧は大臣家の婿として不足はなく、もし雲居雁が内大臣の思惑通りの東宮妃になれずに臣下と結婚するならば「この君より外にまさるべき人やは、容貌ありさまよりはじめて、等しき人のあるべきかは、これより及びなからん際にもとこそ思へ」と思い、自分の手元から雲居雁を取り上げる息子内大臣の処置を怨めしく感じていた。大学の学問を修めるために父

光源氏邸の二条東院に移っていた夕霧は、まだこの展開を知らない。

雲居雁に逢おうと三条宮を訪れた夕霧に対し大宮は、内大臣が二人の仲を知って立腹していることを真顔で話し、それを聞いた夕霧は思い当たりながらも「面赤みて『何』ことにはべらん」とどきまじし「いと恥づかしと思へる気色」を見せる。大宮はいじらしく思い「今よりだに用意し給へ」と話した。それに続く場面であり、季節は秋である。

〔資料一〕『源氏物語』「乙女」

いとど文なども通はんことのかたきなめりと思ふに、いと嘆かし。物参りなどし給へど、さらに参らで、寝給ひぬるやうなれど、心も空にて、人静まるほどに、中障子引けど、例はことに鎖し固めなどもせぬを、つと鎖して人の音もせず。いと心細くおぼえて、障子に寄りかかりて居給へるに、女君も目を覚まして、風の音の竹に待ちとられてうちそよめくに、雁の鳴き渡る声のほかに聞こゆるに、幼き心地にも、とかく思し乱るるにや、「雲居の雁もわがごとや」と独りごち給ふけはひ、若うらうたげなり。いみじう心もとなければ、「これ開けさせ給へ。小侍従や侍ふ」とのたまへど、音もせず。御乳母子なりけり。独り言を聞き給ひけるも恥づかしくて、あいなく御顔も引き入れ給へど、あはれは知らぬにしもあらぬぞ憎きや。乳母たちなど近く臥してうちみじろぐも苦しければ、かたみに音もせず。

さ夜中に友呼びわたる雁が音にうたて吹き添ふ荻のうは風

身にもしみけるかなと思ひ続けて、宮の御前にかへりて嘆きがちなるも御目覚めてや聞かせ給ふらんとつつましく、みじろき臥し給へり。

事態の急変にやるせなさを感じた夕霧は、食事も喉を通らない。

人々が寝静まった頃に雲居雁の部屋を訪ねたが、いつもとは違って中障子には錠が鎖し固められ、しかも人の気配がない。夕霧は心細くなりそのまま開かない障子に寄りかかって座っていると、向こう側にいた雲居雁も目を覚まし、「風の音の竹に待ちとられてうちそよめく」音と「雁の鳴き渡る声」をほかに耳にして、子供心にもあれこれ思い乱れて「雲居の雁もわがごとや」と独り言をつぶやく。その様子はとても可愛らしく、それを聞いた夕霧はたまらず「この中障子を開けてください」と声をかけるが、返事はない。雲居雁は独り言を夕霧に聞かれたことを知り、恥ずかしさに夜具を引き被つてしまう。しかも側で寝ている乳母たちが感づいた様子で身じろぎするので、互いにこれ以上声をかけられない状態だった。夕霧は雁が音と荻の上風を素材として「うたて吹き添ふ」と恋のやるせなさを吐露した歌で応じ、その思いを実感しながら自室に帰っていく。

注目したい本文は傍線を臥した部分で、青表紙本の本文は「風のをとのたけにまちとられてうちそよめくに」とある。河内本系の尾州家本の本文との間に異同はなく、別本系の陽明文庫本とは仮名表記「たけ」が漢字表記「竹」となるのみで、その他の異文は認められない。

二 『白氏文集』と源氏古注釈

この描写が『白氏文集』巻十九所収の七言十二句「贈鴛部吳郎中七兄」の七句「風生竹夜窓間臥（風ノ竹ニ生ズル夜、窓間ニ臥シ）をふまえている」という指摘は、『源氏物語』古注釈の記述から平安末期の世尊寺伊行「源氏釈」や鎌倉前期の藤原定家「奥入」には見えないものの、鎌倉後期の素寂「紫明抄」から見え、室町時代に入り四辻善成「河海抄」や能登永閑「萬水一露」、九条種通「孟津抄」、里村紹巴「紹巴抄」、そして中院通勝「岷江入楚」へと引き継がれていく。当該漢詩は『和漢朗詠集』巻上「夏夜」に第一五一番「風生竹夜窓間臥 月照松時臺上行」として第四聯（第七、八句）が所収され『千載佳句』にも採られているから、平安後期には人口に膾炙する漢詩句であつたらしい。しかし当該漢詩は「時早夏朝暈、閉齋独处、偶題此什」との副題を有し「四月天氣和且清」と始まり、宿直から帰つた自宅で悠々自適の愉しみを詩に作り友に贈つたものであるから、「少女」巻の場面と比較すると、季節も時間帯も心境も全く異なるものである。

『源氏物語』においてはさらに巻二十四「胡蝶」で光源氏が玉鬘に自らの恋心を告白する場面に「雨はやみて、風の竹に生るほど、はなやかにさし出でたる月影をかしき夜のさまもしめやかなるに」とあり、ここではすでに平安末期の世尊寺伊行「源氏釈」から当該漢詩句の指摘が見える。「胡蝶」巻での指摘が古くからあるのは、四

月という季節も風と竹と月という素材も通うからだろう。藤原定家「奥入」にも同様に指摘が見える。しかしながら「少女」巻の当該部分の季節は秋で、「雁の鳴き渡る声」と対比されているが月との対比はない。室町時代に入り素寂「紫明抄」から『白氏文集』の引用が指摘されるはするものの、吹く風が竹をそよがせて音を生じているだけの類似表現に過ぎず、その引用に必然的な深みのあるとは言えない。それを反映するのか『源氏物語』古注釈においても漢詩句の指摘だけにとどまり、内容への言及はなされていないのである。

三 「待ちとる」と「うちそよめく」

当該場面における「風」と「竹」を、「待ちとられてうちそよめく」の本文に注目して考察してみたい。「風の音の竹に待ちとられてうちそよめくに」とは、吹く風がそこにある竹の葉をそよがせてさわさわと音を立てる様を、風が竹に「待ちとられて音を立てる」とした擬人化表現になっている。この場面は夕霧が雲居雁の部屋を訪れ、錠が鎖し固められていて聞かない中障子の向こう側に寄りかかつて座つた時、目を覚ましていた雲居雁が耳にした音を描写したものである。

「待ちとる」とは「待ちて受け取る、待ちて迎へ取る」という意味で、『源氏物語』に十二例見られ、期待して待ち構えている場合にも、また待ち受けながらもその状況を悲しむ場合にも用いられる。

また「そよめく」には、「そよそよと音がする。衣擦れなど人の動

く気配がする。ざわざわと人々のざざめく音がする」の意味があり、『源氏物語』には接頭語「うち」を加えた「うちそよめく」として七例が確認できる。「空蟬」巻では光源氏が空蟬と軒端萩の碁の勝負を垣間見した場面に「碁打ちはつるにやあらむ、うちそよめく心地して、人々あかるけはひなどすなり」とあり、碁の勝負が終了したらしく、さらさらと衣擦れの音を立てながら人々が散会していく様子を描写する。その他「若紫」「未摘花」「野分」「宿木」の各巻に一例ずつ見え、いずれも衣擦れの音などにより人の気配を描写するのに用いられている。さらに「少女」巻では、内大臣に内緒話を聞かれたことを怖れる女房が内大臣と夕霧とを誤認していたと話す場面に「いとかうばしき香かのうちそよめき出でつるは、冠者の君のおはしましつるとこそ思ひつれ」とあり、香りと共に衣擦れの音がした様子を描写している。「少女」巻での「うちそよめく」が当該用例も含め二例とも夕霧との関連で用いられている点に注目したい。当該場面は「風の音の竹に待ちとられてうちそよめく」とあり、本文の上では竹の葉が吹く風にさわさわと音を立てている様子を表現しているのであるが、他の六例から導かれる様に、この音は風に吹かれた竹の葉音だけではなく、中障子の向こう側に寄りかかって座っていた夕霧の衣擦れの音がイメージとして重ねられているのではあるまいか。

四 擬人化表現としての「風」「竹」「雁の声」

この想定を基に、改めて当該箇所擬人化表現を考察してみたい。夕霧は人々が寝静まった頃に雲居雁の部屋を訪れた。しかしいつもは容易に聞くはずの中障子には錠が差してあつて開かない。一方、中障子の向こう側で目を覚ました雲居雁は、竹の葉が風に吹かれて音を立てるのを耳にして「風の音の竹に待ちとられてうちそよめく」の本文となつている。

ここで吹く「風」を「やってくるもの」で「待ちとられるもの」すなわち「待ち迎えられるもの」ととらえ、「竹」を「そこにあるもの」で「やってくるものを待ちとるもの」ととらえて当該部分を分析すると、この場面に描かれた擬人化表現は「風」||「夕霧」、 「竹」||「雲居雁」ということになる。つまり、以前ならば部屋を訪れた夕霧（風）は雲居雁（竹）に「待ちとられてうちそよめく」のに、今夜は異なる展開で中障子が開かず、雲居雁に「待ちとられ」ないために「うちそよめく」こともない状態であった。

一方の雲居雁にとつては、父内大臣の処置により今夜からは夕霧が中障子のこちら側に入つて来られないにもかかわらず、吹く風はいつもの様に庭の竹に待ちとられてうちそよめいている。雲居雁が耳にした「風の音の竹に待ちとられてうちそよめく」音は、自分のおかれた状況の変化を相対的に認識させるものであった。

このように聴覚によつてとらえた景物との対比によつて、夕霧と

の仲の乖離が明確に認識されたからこそ、雲居雁は「雁の鳴き渡る声」をほのかに耳にしてさらに心細さを覚えて共感し、子供心にも思い乱れて「雲居の雁もわがごとや」と独り言をつぶやく。これは歌ことを背景にした効果を生んでいる。

〔資料二〕『源氏物語』古注釈の参考歌、

①世尊寺伊行『源氏釈』前田家本

霧ふかく雲井のかりもわかことやはれせずものはかなしかるらん

②藤原定家『奥入』(第二次) 定家自筆本

霧深き雲井の鷹もわかことやはれせず物の悲しかる覧

③素寂『紫明抄』

きりふかきくもゐのかりもわかことやはれせずものはかなしかるらん

④四辻善成『河海抄』

霧ふかき雲ゐの雁もわかことやはれせずものゝかなしかるらん

⑤里村紹巴『紹巴抄』

雲の独吟 霧ふかき雲ゐの鷹も我ことやはれせず物のかなしかるらん 自是の名也

⑥中院通勝『岷江入楚』

秘これより名となれり
河霧ふかき雲井のかりもわかことやはれせぬ物のかなしかる

らん 秘引歌同之

伊行『源氏釈』の指摘以来、定家『奥入』で引用された形をその後の『源氏物語』古注釈は踏襲していることがわかるが、この歌の典故は周知の如く不詳である。この引き歌は、心が晴れず物悲しい心境を霧深い雲ゐを飛ぶ雁に重ねて詠んだものであるが、歌ことばとして検索すると、他にも適切な和歌が確認できる。

〔資料三〕『古今和歌集』卷四秋上 第二二三番歌

雁の鳴きけるを聞きて詠める

躬恒

憂き事を思ひ連ねて雁が音の鳴きこそ渡れ秋の夜な夜な

雁の鳴き渡る声を聞いて詠まれたこの歌を、当該場面の引き歌として重ねてみれば、「これからこのようにつらいことが続くのだろうか」という雲居雁の切ない思いと漠然とした不安が、表現の対比の構成からも実感されるように、本文が展開していることがわかる。

その思いが凝縮した言葉であるからこそ「雲居の雁もわがごとや」の独り言が夕霧の胸を打って、「これ開けさせ給へ」という切羽詰まった直接的な発言となる。そしてこの独り言を夕霧に聞かれたと知った雲居雁は恋しく待っていたことを知られて恥ずかしくなり、顔を夜具に引き入れてしまうのである。中障子を隔てた二人のやりとりに、傍らで寝ていた乳母たちが感づき身じろぎしているので、これ以上お互いに声もかけられず、夕霧は「小夜中に友呼び渡る雁が音にうたて吹き添ふ萩の上風」と歌を応じて、逢えないつらさを実感しながら自室に戻るのであった。

ま と め

夕霧と雲居雁は、錠で鎖し固められた中障子によって隔てられながらも同じ音を聞いている。夜になって「人しづまるほど」に、「人の音もせず」という時空間で、「心も空にて」という心理状態において二人が聞いたものは、夕霧が心細さにさいなまれ中障子に寄りかかつて座つていた時の衣擦れの音であり、「風」が「竹に待ちとられてうちそよめく」音であり、続いてほかに耳にした「雁の鳴き渡る声」であった。

「うちそよめく」という語は、用例から確認できた様に竹の葉音のみならず中障子の向こう側に寄りかかつて座つている夕霧の衣擦れの音としても重層的にイメージされるものとして機能している。この場面は「風」||「夕霧」、「竹」||「雲居雁」として象徴的にとらえることができ、「風の音の竹に待ちとられてうちそよめく」とは、夕霧の訪れを待ち迎えて、衣擦れの音を立てるに至る状態の擬人化表現として解釈されるべきものではあるまいか。

夕霧の衣擦れの音を、雲居雁は「風の音の竹に待ちとられてうちそよめく」音として聞いた。しかし、今日からそれはかなわない。

風と竹の「待ちとられてうちそよめく」景物を自分と対比するものと認識し、続いてほかに聞こえた「雁の鳴き渡る声」に心細さを共感させ「雲居の雁もわがごとや」と独りつぶやく。その可愛らしき声を聞いた夕霧はたまらずに「これ開けさせ給へ」と声を上げる。

当該場面は、夕霧と雲居雁が闇の中から聴覚によってとらえたものの連鎖によって場面が展開していくのであり、そのありようと擬人化表現との緻密な相乗効果を認めることができると言えよう。

〔注〕

(1) 『源氏物語』本文は、通称「大島本」を底本とする新編日本古典文学全集『源氏物語』三（小学館 平成八年）による。ただし、漢字の表記については、一部私に改めた。

(2) 『白氏文集』本文は、岡村繁氏の『新釈漢文大系』一〇『白氏文集』四（明治書院 平成二年）による。

(3) 『源氏物語別本集成』第五卷 松風少女（桜楓社 平成四年）による。

(4) 『源氏物語』古注釈については、『源氏釈』と『奥入』は池田亀鑑氏編『源氏物語大成』第十三冊（中央公論社 昭和六〇年）、『紫明抄』

と『河海抄』は玉上球弥氏編『紫明抄・河海抄』（角川書店 昭和四三年）、『紹巴抄』は、広島大学国語学国文学研究室蔵の刊本、その他は

『源氏物語古注釈叢刊』（武蔵野書院）による。

(5) 『和漢朗詠集』本文は、新潮日本古典集成（新潮社 昭和五八年）による。

(6) 北山鈴太氏著『源氏物語辞典』（平凡社）の「まちとる」項による。

(7) 『源氏物語の鑑賞と基礎知識』27「少女」（国文学解釈と鑑賞別冊 至文堂 平成十五年三月）による。

——ふるせ・まさよし、安田女子大学文学部助教——